

## 切畑大円貝川三位の墓（一石笠塔婆）

分類 伝承碑  
年代 室町時代と推定  
所在 切畑ケイレンの内



一二世紀の初め、藤原長乗、（通称貝川三位長乗）という人物が一族三六人をひきいて木代に來住し、大円を拠点に木代・切畑を開いた。長乗は、藤原鎌足から一八代の子孫にあたる藤原乗政の三男として生まれ、騎射にすぐれ、檢非違使や佐渡守に任ぜられ、從三位にまで上りつた人物である。康治二年（一一四三）に没し、この地に葬られたという（『本朝人物編』）。この所伝は広く知られるものである。

貝川三位が実在した人物であったかどうか明らかではないが、彼が活躍したといわれる平安時代末期は、当地では中世村落の形成がすすんだ時期であった。

貝川三位の墓と伝えられるこの一石笠塔婆は、約一〇mの塚の上に建っている。高さは約四〇cmで、最上部の宝珠の形、笠の流れ、軒反りなどは鎌倉時代の余風を残すが、造立は室町時代と思われる。塔身は、方柱に少しばかりの面取りがある。



# 切畑法性寺石風呂 (府指定文化財)

分類 石風呂  
年代 鎌倉時代と推定  
所在 切畑法性寺境内



外部側面



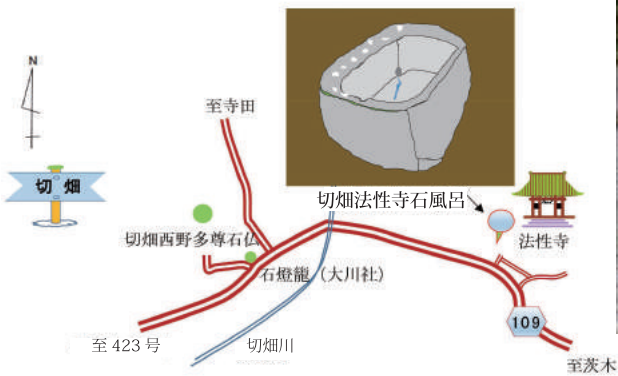
底部

切畑中の西の集落にある法性寺の石風呂は、石造の浴槽である。使用目的は明らかでない。僧侶が齋戒のために使用したという説、人々が厄病除災にご利益があるとして入湯したという説、単に人々が共同浴場として使用したという説などがある。

石風呂の遺存例は、大阪府下には豊能町・高槻市・茨木市・泉大津市にある。豊能町にはこの法性寺と木代福田の頂応寺跡にある。

法性寺石風呂は、切畑の旧走湯天王社の石槽と伝えられている。石材は花崗岩、長辺二〇〇cm、短辺一三〇cm、内法は各一五〇cm、深さ五〇cmである。底部に、側面の排水口にかけて浅い溝があり、また短辺部の上部に一ヶ所、給水口とも思われる三cmほどのくぼみがつけられている。

製作は鎌倉時代と推定されている。この石風呂は、昭和四十九年三月、木代福田の頂応寺跡の石風呂と共に大阪府有形文化財に指定された。



外法 (cm)			内法 (cm)		
長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ
200	130	70	150	82	50



# 切畑法性寺地藏石仏

分類 地藏石仏  
 年代 正和三年(二二一四)  
 所在 切畑法性寺境内

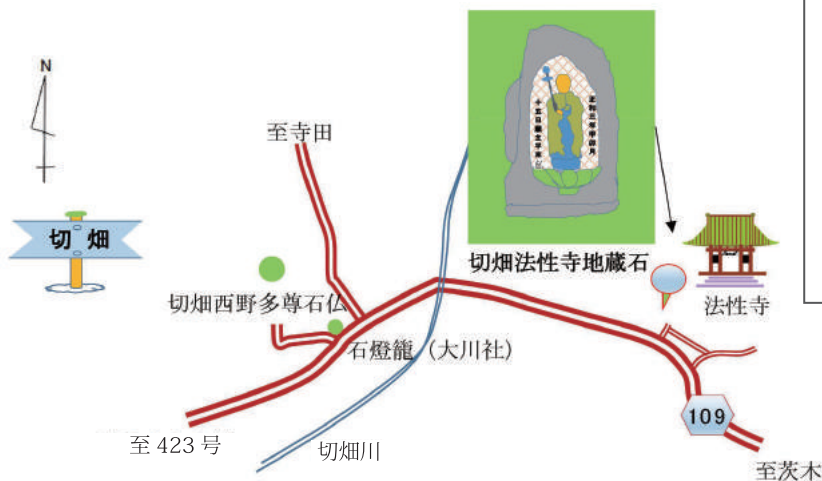


法性寺の墓地の入口に立っている。  
 石英閃緑岩、高さ一三三cm、最大幅七九cmの自然石の表に大きく蓮華座を刻み、上に高さ八三cmの舟形を彫りくぼめ、像高七〇cmの地藏立像を肉厚彫りする。右手に柄の短い錫杖を持ち、左手に宝珠を捧げる。衣紋は左右相称だが、像容よく整い、写実的であり、像全体から受ける感じは、ゆったりとして悠揚としたものがある。蓮弁の形もまるく大きくふくらみ、典型的な鎌倉後期の形である。像の左右の光背内に次の刻銘がある。

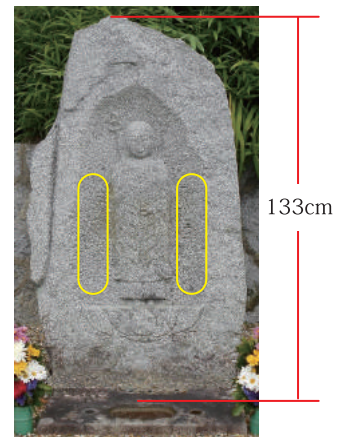
右側 正和三年甲寅卯月(二二一四)  
 左側 十五日願主平末弘

(※弘は弘の異体字)

この頃は鎌倉後期中頃で、石造美術が最高の造形美に達した時期である。本町におけるこの時代の在銘石造文化財は、大円釈迦堂の乾元二年銘の阿弥陀三尊笠塔婆とこの地藏石仏の二基であるのみで、この点からも本町における重要な文化財である。南北朝に入ると下所の地藏石仏のようにやさしくなる。



(右側) 正和三年甲寅卯月  
 (左側) 十五日願主平末弘



# 切畑大円釈迦堂 阿弥陀三尊笠塔婆

分類 笠石仏  
年代 乾元二年（一三〇三）  
所在 切畑大円釈迦堂

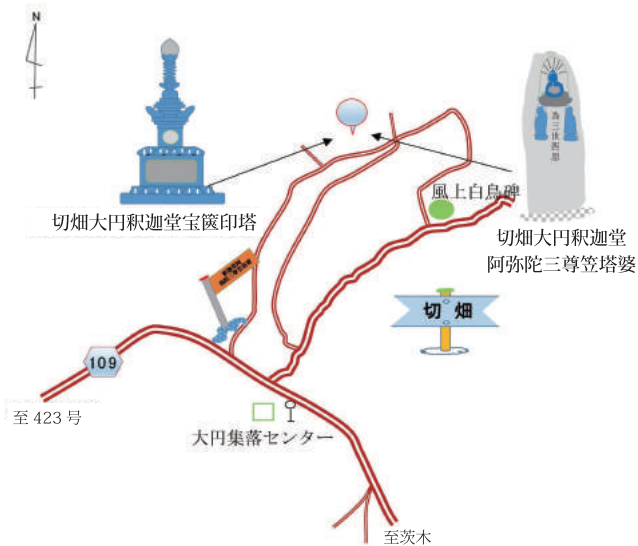


府道一〇九号線より北に約二〇〇m入った大円の北方丘陵端の釈迦堂横に建っている。細長い地上高一四六cmの自然石に彫られており、頂上は水平で、上に柄（ほぞ）が残っていて、もと笠石があつたことがわかる。東面した上部のそれぞれ舟形の彫り込みの中に、阿弥陀三尊を厚肉彫りする。中尊は坐像で坐高二九cm、印相は弥陀の定印と見られる。その下にある左右の観音・勢至の両脇侍はそれぞれ像高二五cmの立像、観音は蓮台を持ち、勢至は合掌する。中尊の肉髻高く、ゆつたりとした荘重な像容は鎌倉後期の特色を示している。中尊の下に左の刻銘がある。

為三世四恩也乾元二年并卯二月下旬願主敬白  
（※并は癸の異体字）

乾元二年は、鎌倉後期一三〇三年である。豊能町最古の石造文化財で貴重なものである。

刻銘の「三世」とは、過去・現在・未来の三つを指している。また前世・現世・来世の三世を指す。さらに「四恩」とは、一般的には父母・衆生・国王・三宝の恩をいう。三宝とは、仏（悟りを開いた人）・法（その教え）・僧（教えを奉ずる教団）をいう。



# 切畑大円釈迦堂宝篋印塔

分類 宝篋印塔  
 年代 室町時代中期と推定  
 所在 切畑大円釈迦堂



大円釈迦堂の阿弥陀三尊笠塔婆の横に宝篋印塔が一基建っている。総高一四〇cmで、各部は完全に残っている。基壇上部は線形座で、基礎は上端複弁の反花座、側面に輪郭を巻き、内に格狭間が入っている。

塔身は各面とも輪郭を巻き、中に月輪を浮き出して、内部に金剛界四仏の梵字を葉研彫りしている。笠は軒下二段、上六段の段形、隅飾は二弧輪郭付きである。相輪も完全に残り、下の請花は複弁八葉、上の請花は単弁八葉である。室町中期の様式を示している。

本町における完全な形の宝篋印塔の中で、中世のものではこの塔のほかに、法輪寺境内に二基、牧の梅相院墓地内に一基、鴻応山登山口付近に一基ある。これらは室町期のものと思われる。他にも欠損塔や寄せ集め塔は、南北朝の文和四年銘の法輪姫塔を含めいくつか確認されている。





# 切畑西野多尊石仏

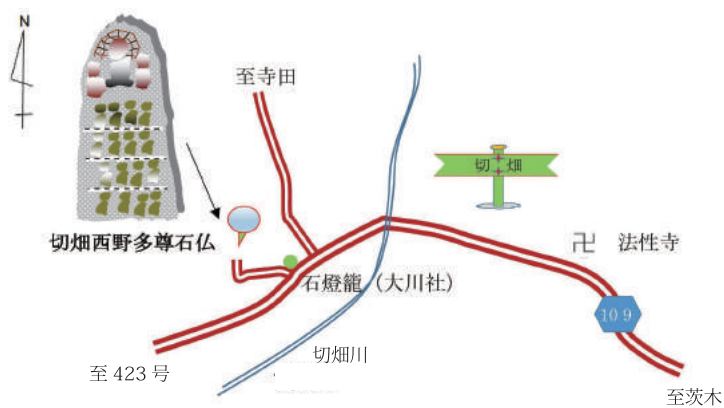
分類 多尊石仏  
年代 天正三年（一五七五）  
所在 切畑西野



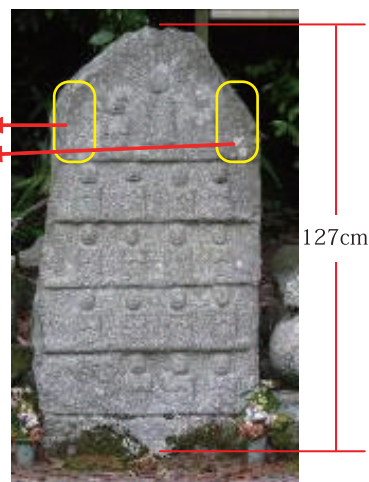
切畑西野の集落の北側山麓に、福聚観音堂という大変めでたい名のお堂があり、その境内の山側にある。

頭部は山形で高さ一二七cmの石英閃緑岩、幅は約六〇cmの板状の石に合計十八体の像が彫り出されている。上部に阿弥陀三尊の立像、その下部四段に四・四・四・三体ずつ一五体の坐像がある。阿弥陀如来は高さ二四cmの来迎印のよううで、頭の周りに放射光が彫られている。その下の一五体は高さ十七cmいずれも同形同大の円頂合掌像で、おそらく供養者と考えられる。

阿弥陀三尊に向って右側の肩に「為逆修」、左側の肩に「天正三」亥年八月三日」（「」はこの異体字）と刻まれている。このように多くの像を一石に彫った石仏や磨崖仏が本町に七基、隣の箕面市や茨木市にも数基ある。いずれも同じような彫法で、年代も天正年間に集中している。旧東能勢村を中心としたこの地方独特のもので、いずれも阿弥陀如来を主尊とし、来世の極楽往生を祈願して建立されたものであろう。なお、この境内には他にも欠損している宝篋印塔などがある。



（右側）為逆修  
（左側）天正三」亥年八月三日



# 切畑大円下所阿弥陀磨崖仏

分類 磨崖仏  
年代 南北朝時代と推定  
所在 切畑大円下所



長安寺跡多尊石仏の北側の採石場入口から、石切り場の一番奥まで行った所、巨大な岩の下部に南面して彫られている。小道の下で少しわかりにくいところにある。岩は石英閃緑岩で、豊能町に分布する岩石である。

高さ二四〇cm、幅二四〇cmの大きさでその下部に、高さ二五cmの舟形を彫り、中に定印の阿弥陀如来坐像を半肉彫りにしている。

この磨崖仏は、五〇〇m程東方にある大円字小松の阿弥陀三尊磨崖仏に酷似した作風で、同一作者ではないかと思われる。無銘であるが、南北朝頃のものと思われる。

阿弥陀如来の形相には定印・説法印・来迎印があるが、石仏の場合、この磨崖仏のように定印のものが一般的である。



# 切畑大円下所多尊磨崖仏

(長安寺跡多尊磨崖仏)

分類 磨崖仏  
年代 天正二年(一五七四)  
所在 切畑大円下所



大円下所地藏石仏の少し南方、採掘場跡の南側道沿いに、長安寺跡多尊仏といわれている磨崖仏がある。高さ一七八cm、幅三〇〇cmの石英閃緑岩の自然石に刻まれ、三段の枠内に合計二二体の円頂合掌の坐像と二体の阿弥陀立像および一基の五輪塔が半肉彫りされている。

最上段中央の舟形の中の、像高一九cmの阿弥陀像は放射光を放ち、左右に二体ずつの坐像が彫られている。

阿弥陀像の下の枠内に刻銘あり、その右側に四体の坐像、左側に高さ四〇cmの五輪塔、その地輪部にも銘文がある。最下段には一四体の坐像がある。何れも長方形の彫り込みの中に半肉彫りされ、ほとんど同形で座高一八cm前後、供養者像と思われる。

次のように刻銘されている。

(阿弥陀像の下に)

為逆修壇

天正二甲戌年

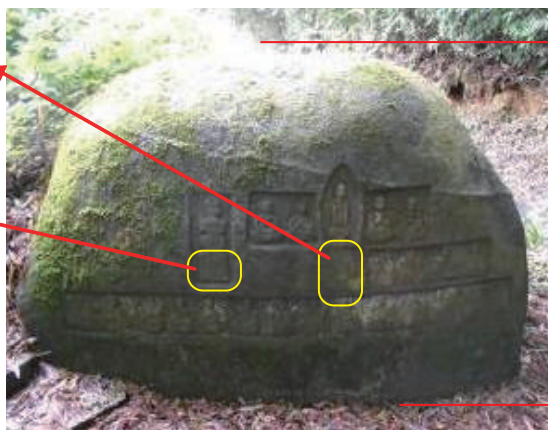
十一月吉日

(五輪塔の地輪に)

天正二年

為逆修

五月十五日



(阿弥陀像の下に) (五輪塔の地輪に)  
為逆修壇  
天正二甲戌年  
十一月吉日  
天正二年  
為逆修  
五月十五日





# 切畑大円下所地藏石仏

分類 地藏石仏  
 年代 南北朝時代と推定  
 所在 切畑大円下所



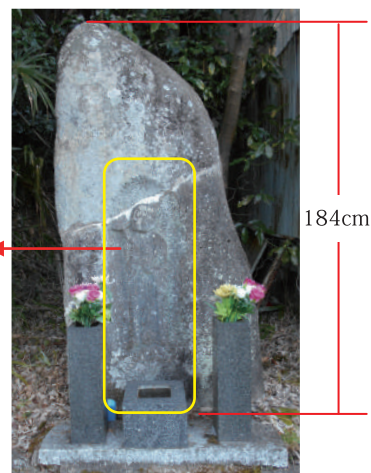
大円バス停から府道一〇九号線を西へ約三〇m入った右側の山裾に、この地藏石仏が建っている。府道からも遠望できる。

地藏は付近から掘り出されたものという。

高さ一八四cmの自然石の表に高さ八五cmの舟形を彫り込み、中に蓮華座上に立つ像高七二cmの地藏立像を半肉彫りしている。頭部のすぐ上で割れているが、セメントで補修されている。

像はすらりとした長身で、しかも引き締まった感じであり、なかなか好感がもてる。お顔は童顔で、スマートな衣紋と共に、若々しい感じの地藏像である。法性寺の地藏石仏と酷似している。この地藏石仏は非常に優しい感じで、蓮弁の形なども考えると年代は少し降って、南北朝時代の造立と見られる。

無名であるが時代の特色をよく表している。



# 切畑大円小松阿弥陀三尊磨崖仏

分類 磨崖仏  
年代 南北朝時代と推定  
所在 切畑大円小松



切畑大円小松の観音堂前の府道をへだてた斜面にある。

高さ一二〇cm、横幅二一〇cmの岩面に阿弥陀三尊の磨崖仏が彫られている。

中央の阿弥陀如来は、舟形の彫り込みに半肉彫りした二七cmの坐像である。左右の観音、勢至菩薩は内側を向いた姿の坐像となっている。

近所の人が「小松の横向き地藏」と呼んでいるのもこのお姿から出たものであろう。

三尊の姿は、肉付けが豊かで、丸みある彫りである。童顔の面相で実にかわいらしく、その姿は印象的である。作風は大円下所の阿弥陀磨崖仏に似ていて同一作者とも考えられる。南北朝期の作と思われる。



# 切畑中の西多尊石仏

分類 多尊石仏  
年代 天正三年（一五七五）  
所在 切畑中の西



法性寺の東に清水の湧く井戸があり、その横の道に登って行くと、簡単な屋根の祭壇がありそこにこの石仏が祀られている。  
石英閃緑岩の高さ一四四cm、幅約六〇cmの板碑で三つに割れている。もと溝川の橋の一部として使われていたものを、近くの人たち三軒でここに祀り、供養している。

上部に立像の阿弥陀三尊を彫つてあるが、右側の観音菩薩が大きく欠損し、中尊の阿弥陀如来も首の所で大きく欠けている。阿弥陀は高さ二六cm、頭部に放射光がある。三尊の下には五列四段に二〇体の全く同形の立像が並んでいる。何れも円頂合掌で、蓮華座上に立つが、この板碑の造立を志した供養者であろうと思われる。阿弥陀と勢至との間に次のような刻銘がある。

天正三し亥年九月吉日（一五七五）

（※しは乙の異体字）

（勢至像の左側）

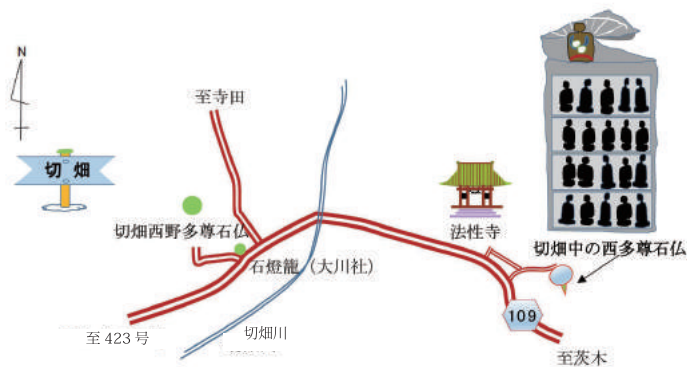
道見

他にも刻まれているようだが、ほとんど読めない。



144cm

（阿弥陀像）  
（左側）  
（勢至像）  
（左側）  
道見  
天正三年し亥年九月吉日





# 切畑風上の地藏磨崖仏

分類 磨崖仏  
年代 不詳  
所在 切畑



高さ一七二cm、幅一二〇cmの三角おにぎりをした自然石（石英閃緑岩）に地藏立像が半肉彫りされている。像高は二七cmで錫杖を持つている。地藏の左肩と衲衣の一部が欠損している。風雨にさらされ剥離が進んでいるが、今もおらかな造形美と石工の匠な技が楽しめる。本町逸品の石造物である。地藏立像には年号の銘はないが、丸い顔立ちと全体の姿は木代にある貝川三位塚の磨崖仏に似ている。この地が人々の生活の場であり、地藏信仰が深く行われていたことがわかる。

近くに本町最古の石仏、鎌倉後期の乾元二年（一三〇三）の大円釈迦堂阿弥陀三尊笠塔婆がある。

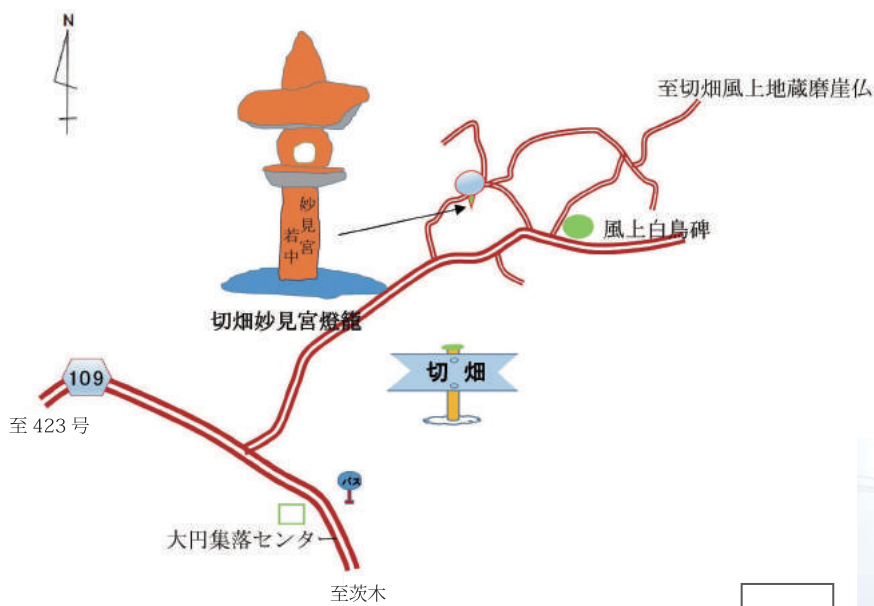


# 切畑妙見宮の石燈籠

分類 燈籠  
 年代 嘉永四年（一八五二）  
 所在 切畑



切畑小平尾にあり、正面に「妙見宮」「若中」右面に「嘉永四年（一八五二）亥八月」の刻銘がある。この地区の若者集団の組織「わかなか、わかじゅう」で、神輿かき、獅子舞い、にわか芝居、太鼓かきなどはみな若中がとめていた。昔は火消し役をしていたようである。この燈籠は若中が建てたものである。



（正面）妙見宮 若中  
 （右面）嘉永四年亥八月